[阪大ニューズレター]
社会と大学を結ぶ季刊情報誌

Handai NEWS Letter

SEASONAL MAGAZINE

Published by OSAKA UNIVERSITY

No.42
2008/Winter

発行日：平成20年12月1日
発　行：大阪大学
大阪府吹田市山田丘1-1
06-6877-5111
ホームページ：
http://www.osaka-u.ac.jp

◉総長カフェ　21世紀懐徳堂ライブ ── 遠山敦子／鷲田清一 ──1

知の拠点＝大学改革事始め

◉産学連携 ── 兼松泰男 ── 7
人材養成とイノベーションの相乗効果で世界標準の博士人材を輩出しよう

OB訪問──平岡英信・学校法人清風学園・学校法人清風南海学園理事長 ─ 9
元気です！在学生──南谷英美・大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻博士後期課程２年生 ─ 10
健康──感染性心内膜炎について ─ 中谷　敏 ─ 11
心理・行動──百寿者のからだとこころ ─ 権藤恭之 ─ 12
研究室紹介──ヒューマンインタフェースを形に ─ 岸野文郎・北村喜文 ─ 13
阪大ニュース──和やかに名誉教授会開催 ほか ─ 14
大阪大学・東北大学合同フォーラムをサンフランシスコで開催 ほか ─ 15

総長カフェ
21世紀懐徳堂ライブ

知の拠点＝大学改革事始め

発想を転換し、前例のないことに挑戦する

●新国立劇場運営財団理事長（元文部科学大臣）―遠山敦子―*Atsuko Toyama*
●大阪大学総長―鷲田清一―*Kiyokazu Washida*

国立大学が法人化されたときの文部科学大臣、遠山敦子さんは文部省（現 文部科学省）に初の女性上級職として入り、前例中心主義の官僚の世界で次々に前例のないことをやってきた。困難に直面しても三日三晩考え続ければ、必ず出口が見つかるという。鷲田総長との対話は、教育と文化の世界を舞台にした「キャリア版細腕繁盛記」のごとく痛快で勇気づけられる。

みんな自信がないというか、自分を簡単には肯定できない。
自分に何ができるかとか、どんな能力があるかとか、自分の存在をすごく意識しすぎて、
自分が他人のために何ができるかというふうにはなかなか考えられない。（鷲田）

常に前例なき挑戦

鷲田　遠山さんには、今年の1月に阪大の第1回男女共同参画シンポジウムでお話をしていただきました。学生たちは男女とも、とても勇気づけられたと言っていました。

遠山　先進国の中でも日本の社会は、女性の活躍の場が極めて限られています。出産育児は女性が主として担うわけですけれど、職業を継続していけるような環境づくりを、まず大学からでも進めてもらいたいですね。私が文部省の高等教育局長のとき、大学の学長・総長、研究機関の長に集まってもらったことがありましたが、約150人全員男性で、説明者の私だけが女性でした。大臣のときもそうでした。やっぱり女性の力をもっと活用して、女性たち自身も生き生きと生きるということについての社会変革をやっていかないと、人口減の社会で男性ばかりに頼っていてはやっていけなくなります。私などが職業の場に出たころは、女性で大丈夫かなという感じがあったでしょうが、今や女性は非常に優秀であることが認められてきています。

鷲田　遠山さんは常に女性一人という状況で、道を開拓してこられたんですね。私たちの世代ですら、卒業して就職した女子学生は半分ぐらいだったと思います。

遠山　それは門戸が開かれていなかったから。私が大学に入学した50年前には、東京大学の文科一類は約800人いて、女子学生が一人でした。そんな異様な中で教育を受けて、いざ就職しようと思っても、企業は全くシャットアウト。それで公務員になったのです。幸い文部省は門戸を開いていたものですから。

鷲田　それも女性のキャリアとしては初めてですね。

遠山　はい。私は女性の先輩のいないところで、パイオニアとしてやりたかったから文部省に入りました。私は担当の部署で、常に困難なことに挑戦しましたから、いつも前例がないんです。上司たちが非常に寛容で、次々に新しい経験ができるようなポストへ就けてくださった。女性だからということで進路を滞らせるのではなくて、チャンスを与えることが大事ですね。

発想の転換で気が楽に

鷲田　真っ黒な学生服の男子の中で、まさに紅一点。お役所の中でも、新しいことに取り組むということ自体が大変なところへもってきて、男女共同参画という言葉などない時代、ちょっとしたことでも意識的にならざるをえないことだらけで、ものすごいストレスだったでしょうね。

遠山　あまり気にしなかったから良かったのでしょうね(笑)。最初は自分がどう見られているかを意識していたのですが、数年たったときに、他の人が自分のことをどう思うかじゃなくて、自分が他の人のために何ができるかを考えることにしようと、発想の転換をしました。それからは、もう全然気にならなくなりましたね。

鷲田　今おっしゃったことは、今の若い人にそのまま通じると思うのです。みんな自信がないというか、自分を簡単には肯定できない。自分に何ができるかとか、どんな能力があるかとか、自分の存在をすごく意識しすぎて、自分が他人のために何ができるかというふうにはなかなか考えられない。

遠山　発想の転換ですね。若い人たちが企業や大学などの組織に入っても、何々してくれない、理解してくれない、チャンスを与えてくれないとか言いますが、「してくれない」から「自分がこうしよう」というところへ発想の転換をすれば、すごく気が楽になるのですね。文句を言っていてもしようがないから、じゃ今度は「自分があなたたちのために何ができるか、この組織のために何ができるか、この日本のために何ができるか」。私の場合は幸いにも公務員ですから、自分が努力をすればその分野において社会の役に立つという志はあるわけです。志と目的の点で全く迷うことはないですから、困難があればそれを突破していく力がわいてきました。

親の教えと富士山が核に

鷲田　そういう自信や信念は、いつ、どういうかたちではぐくまれたのでしょうか。

遠山　まず、親から唯一期待されたこと、親からの教えは「世の中の役に立つ人になりなさい」、それだけなんです。父からも母からも、勉強しなさいとかは一切なしです。

鷲田　はぁーっ、「世の中の役に立つ人になりなさい」と、シンプルにその一つだけ！

遠山　それと富士山ですね。中学、高校時代を静岡で過ごしました。毎日、富士山を眺めていると、それに照らして自分がどうかということを考えれば、志高く、崇高に生きるよりほかないですからね。雄大な富士山に恥じない人生を。

鷲田　風景って、やっぱり大事なんですね。富士山という誰もが認めざるをえない大きな核があったんですね。私なんかは富士山もないし、海もない京都でしたから、家しか見えず、山といえば比叡山と愛宕山ぐらいで、雄大な風景なんて望めませんでした(笑)。

遠山　それだからこそ、思索の深いすぐれた哲学者が育ったのでしょうね。

仕事の面白さには代えられない

鷲田　文部省に入られて、勤務のハードさは今と変わりませんか。

遠山　今よりもっと大変でしたね。年末の予算編成作業のときは10日間ほど泊まり込みで、ボストンバッグに着替えを詰めて家を出ます。机の上や床に新聞紙を敷いて仮眠を取り、夜中も資

大学の場合でも、今まで研究をすればいいんだとされたのが、人を育てることを第一に挙げるようになった。教育、研究、社会貢献・社会連携の三つをうたうようになり、大学の空気は変わりましたね。（鷲田）

料づくりの作業です。普段でも国会開会中は答弁書きで、たいてい夜の1時過ぎでした。タフでないと務まりませんね。

鷲田　そんな勤務状態が続くなかで、女性しかできない出産も経験なさっています。

遠山　出産の2週間ぐらい前まで働いていたかな。病院に入ってからも原稿を書いたりして、出産2週間後には出勤していましたね。母が子どもの面倒を見てくれましたし、夫もよく協力してくれたものです。当時は家族のサポートがなければ、仕事を続けられなかったんです。

でも、仕事の面白さには代えられませんね。自分が努力をして、仕事を通じて何か役に立ちたいという気持ちがありますから、その他のことはもう大した問題ではなかったんですね、私にとっては。

鷲田　確たるものを持ち、シンが一本通っている人って、強くなれるんですね。

国費ゼロで新国立劇場建設

鷲田　文化庁時代は、率先して基金を集められたり、新国立劇場の建設のため奔走されたそうですね。

遠山　今から20年前、文化庁次長のときに、芸術文化振興基金を設けました。これは民間から100億円を集めてきたら、国から500億円の補正予算を組んでもらえるかもしれないというとてつもない大計画でした。当時はまだバブル崩壊前でしたけれど、そんなことは全く不可能だからやめたほうがいいと周辺から強く言われたものです。でも、日本の文化予算はものすごく低いため、どうしてもやらなくては、と決意しました。しかし、国家公務員でありながら、しかも芸術文化のために民間企業からお金を集めるのは前例もなくて、至難の業でしたね。

鷲田　総長として、私も見習わなければいけないので、その秘訣をちょっと教えてください。

遠山　社長を訪ねていくと、まず総務部長に会えとおっしゃるんですよ。でも、総務部長では何百万円の話になるから、「1社1億円お願いします」と、社長のところへ飛び込んで訴えました。「日本は経済成長を遂げ、企業が非常にいい仕事をしていただいていますが、文化も大切にする国にしなくては世界から尊敬されません。1億円出していただいたら貴社の名前は、『文化貢献企業』として永遠に残ります」と。これも窮余の一策として思いついた次第です。

鷲田　芸術文化振興基金によるサポートは、若手の芸術家や演出家に感謝されています。新国立劇場の建設についても、そのときに種をまかれたのですか。

遠山　ええ。ここの用地は決まっていたのですが、建設するには文化庁の年間予算の1・5倍もの莫大な費用がかかる。そこで、新国立劇場の「空中権」を建設費に充てることにしたのです。低層の劇場の余分の容積率を隣の東京オペラシティに移管する、いわば買ってもらうことで、民間の資金を得て建設にこぎつけました。この劇場は一円も国費が入っていないのです。

鷲田　それは遠山さんが案出されたのですか。

遠山　空中を分割して利用する権利はアメリカでは発達していますが、日本では前代未聞で、官が民間からお金をもらって国立の建物を建てるとはとんでもないと批判されました。とんでもないと言っても、予算がつかないわけですからね。何十年間もオペラ歌手たちは、オペラハウスがほしくて要望し続けてきたのです。幸いにも大失敗しないで完成しました。

三日三晩考えれば活路あり

遠山　大学改革の最初は、高等教育局の企画課長のときに大学審議会を創設したことです。日本の大学はこれでいいのか、大学内だけではなくて大所高所から有識者の人たちに議論してもら

**日本の教育が良くならないのは
大学が良くならないからだと痛感していましたから、
信念を持って大学改革を進めました。**（遠山）

おうという狙いだったのですが、大学の自治を侵すとか、大反対を受けました。それでも私は、日本の大学はこのままでは世界に伍していけないと考えていましたし、その前に初等中等教育局で中学校教育課長をやっていまして、日本の教育が良くならないのは大学が良くならないからだと痛感していましたから、信念を持って大学改革を進めました。その後、大学審議会の議論が進んで、1991年に大学設置基準の大綱化が打ち出され、改革のボディーがつくられる契機となったのです。

鷲田　そういう大胆な仕組みをつくられたことが、文部科学大臣のときの国立大学法人化につながっていくのですね。目に見えない仕組みをつくることは、科学技術における発明と同じく、あるいはそれ以上に難しいことのように思います。

遠山　私はそういうことを考えるのが大好きなんです。例えば、中学校教育課長のときに、日本中の中学校で校内暴力が燃え盛っているかのように、連日マスメディアで報道されました。実際は一部だったのですが、さあどうするかということになったのです。「あなたがしっかりしないからこうなったんだ」と国会で言われまして、答弁をして帰ってきて夜中の11時ぐらいから、みんなに議論してもらいました。なんとか解決しなくてはいけないのに、名案が出てこない。三日三晩、ほとんど寝ないで懸命に考えました。すると朝になって、「ああ、こうしよう」という妙案が出てくるんですね。困難な状況に自分を置いて、何かしなくてはと考え続けているうちに、解決の仕組みというか方法が、ぱっと浮かぶのです。

鷲田　えらく簡単におっしゃいますが、これもまた勇気づけられることです。

遠山　だいたい三日三晩集中してやれば、必ず活路が見いだせます。そのようにして芸術文化振興基金や新国立劇場をつくり、大学審議会を設置し、校内暴力の問題にも対処してきました。そして、トルコ大使のときもいろいろありましてね（笑）。

トルコ大使として震災支援

鷲田　文化庁長官を務められたあと、1996年にトルコへ大使として赴任されました。そこでも、やはり前代未聞のお仕事を……。

遠山　日本との交流のために、トルコが敷地と建設資金の大半を提供して、アンカラの郊外に土日基金文化センターを建てていただきました。その際、日本からも寄付を集めてくれと言われたのですが、バブル崩壊後で日本の企業は最低のときでしたから大変でした。トルコ側の誠意にも応えなきゃいけない。企業を回って一生懸命集めても、せいぜい1億円余りでしたけれども、とても喜ばれました。

それから、任務を終える直前の99年8月に大地震が発生しまして、地震国である日本の専門家を呼んだり、支援のルートをつけるのに奔走しました。その一つが、阪神・淡路大震災で使用されたプレハブを、家を失ったトルコの人たちに使ってもらう案でした。神戸の皆さんは喜んで協力してくださったのですが、民間の船で運べば大金がかかる。一計を案じて、海上自衛隊に運んでもらうことにしました。自衛隊がそんな任務外のことをやるのはけしからんと、国会でも大議論になりました。これもまた、聞くも涙の物語がいろいろあるのですが、1千戸分のプレハブを積んだ船がインド洋を渡ってイスタンブールに着くであろうという状況を確認して帰任しました。

鷲田　すごい発想ですね。かっこいいというか、ちょっと出来過ぎかというくらいですね。そういうトルコでの経験から、トルコの社会や歴史を紹介するご本を執筆されたんですね。

文明の十字路から世界が見える

遠山　トルコで強烈な印象を受けたことが三つありました。一つはヒッタイト文明から始まってビザンチン文明、オスマン帝国の文化など、あの大地の上で興亡した文明の歴史の蓄積のすごさ。第二に、イスラーム世界の中で政教分離をやり、市場経済を実現し、そして民主主義という難しいことをやってのけている国であること。第三に、あそこの地に立つと、世界が見えてくるのです。文明の十字路といわれていますが、地政学的にものが見えるんですね。EUは、中国は、ロシアはどうしてそう考え、そういう動きをするのか、見渡せます。もちろん中東情勢は情報がどんどん入ってきます。

鷲田　今まで学校で習う世界史は、四大文明が始まるところからそれぞれ別

「こう変わる学校 こう変わる大学」（講談社）
「トルコ 世紀のはざまで（英訳版）」

**これからの大学は、教養教育を重視し、
もっと国際化していかないといけませんね。
この二点が日本の大学、
特に学部教育における目標ではないかと思います。**（遠山）

個に歴史を語り出してきました。しかし、世界史の概念が変わり、ユーラシアのクロスロードから歴史を語っていって、中国史、日本史も含む世界全体を通覧していくような世界史の教科書も、検定を通って出てきています。世界史だけでなく、私は日本史の授業の半分は英語で教えたらどうかと思っています。英語の勉強も兼ねて、自分の国のことを英語できちっと伝える練習をすれば、日本の見方が変わるし、海外で日本のことを聞かれたときに役立ちます。

大学は自らの意思で自主的に運営を

鷲田　さて、文部科学大臣時代の大学改革のお話も、お聞きしないわけにはいきません。

遠山　あの時は新しい世紀の始まりで、構造改革の嵐が吹きました。その中で単なる民営化、地方分権として教育が論じられていいのか、このまま流されたら日本の未来はないと思ったんです。私は若い時から大学問題に取り組んできており、何が大事か、ある程度把握できていたものですから、むしろ構造改革という風を利用したうえで本来あるべき大学の姿にすることができないかと考えたわけです。「大改革をします、あえて民営化ではなくて法人化をします」と。高等教育関係の担当者も非常に優秀で、議論を重ねながら、素早く遠山プランを出しました。

民営化で本当に良くなるならいいのですが、国費をできるだけ使わないようにしようというのが発想の原点なんですね。知の世紀と呼ばれているのに、知の拠点が崩れ去っては問題です。大学は本来、自らの意思で自主的に運営をする組織であるべきで、トップの学長・総長がもっとリーダーシップを持って意思決定のプロセスも明快にして、そして自らの大学の特色を出していく、それを可能にする制度にするほうがいいと、一気にそちらへ持っていきました。小泉総理との間で対峙する場面がありましたが、小泉さんは法人化の話を真剣に聞いて、最後は「分かりました」と言ってくれました。ノーと言われたら、こちらは辞表を出すつもりでした。

教育現場に複眼的思考を

鷲田　義務教育や大学の問題など、遠山さんが始められたこと、その取り組みからできた制度を振り返ってみると、複眼のイメージ、複眼的な思考があるように思います。例えば、科学技術立国を目指して理系教育を重点的に行うスーパーサイエンス・ハイスクールのような研ぎ澄ました教育の一方で、子どもたちの壊れそうな心、ヒリヒリして傷つきやすい心を生きる力にまで持っていくためのサポートの在り方や、閉鎖的で息がつまるような学校に民間人を登用するなど、複眼的な制度が考えられています。

大学の場合でも、21世紀ＣＯＥプログラムのように競争的資金による支援と同時に、これは法人化で劇的に変わった点ですが、研究拠点型でやってきた国立大学が常に自分たちのミッションとして教育を重視するようになったこと。そして社会貢献。今まで

研究をすればいいんだとされたのが、人を育てることを第一に挙げるようになった。教育、研究、社会貢献・社会連携の三つをうたうようになり、大学の空気は変わりましたね。

遠山　大学は、研究の場である前に、教育を重視していただきたい。教育ほど楽しい仕事はないですよ。私も公務員でなければ学校の先生になりたかったですね。だって真っ白な心の中に、何らかの核をつくらせるわけですから。人生で、こんないい仕事ってありませんよ。

教養教育と国際マインド重視で

遠山　これからの大学は、教養教育を重視し、もっと国際化していかないといけませんね。この二点が日本の大学、特に学部教育における目標ではないかと思います。

鷲田　最後にいいことを言っていただきました。その言葉をしっかりミットで受け止めます。大阪大学は法人化後、全国に先駆けて、高学年次、さらには大学院の教養教育に力を入れてきました。コミュニケーションデザイン・センターという名称で、将来の副専攻も見据えつつ、研究科の壁を取り払って大学院の教養教育を始めたんです。大学院生たちが一般市民からの調査依頼に応えて、問題解決のために話し合えるサイエンスショップも開設しています。

　また、日本語を含む25言語の専攻を有する旧大阪外国語大学と統合したことにより、第二外国語をドイツ語、フランス語のほかに、中国語、朝鮮語、スペイン語、イタリア語、ロシア語の7言語に広げて、自由に選べるようにしました。院生にも24言語を学べるようにして、国際社会で仕事ができる新しいタイプの研究者を育成したいと考えています。

遠山　多数の言語を、入門だけでも学んでおいてくれるといいですね。教養教育と国際マインドが、これからの教育のポイントになると思います。先ほど言われた複眼的な思考も、積み重ねた教養があってこそ可能になるものです。

鷲田　教育によって人が成長していく、自分でも予測していなかったふうに変わっていくのですから、授業の方法や評価も、そのつど最善のやり方があって、それを一元的なものにしてしまったらいけないんですね。

遠山　そう思います。つまり、富士山へ登るのにいろんな道があるんですよ。

鷲田　雄大な富士山の話に戻ったところで、締めくくりたいと思います。本日はありがとうございました。

●遠山敦子（とおやま　あつこ）
1938年三重県生まれ。中学、高校は静岡。東京大学法学部卒業。文部省（現文部科学省）に初の女性上級職として入省。初等中等教育局中学校教育課長、高等教育局長などを経て、94年文化庁長官。96年駐トルコ共和国特命全権大使、2000年国立西洋美術館館長。01年４月～03年９月、文部科学大臣。05年４月、新国立劇場運営財団理事長に就任。現在、財団法人パナソニック教育財団理事長、トヨタ財団理事長、独立行政法人科学技術振興機構顧問など、教育、文化、科学の各分野に携わっている。著書に『こう変わる学校 こう変わる大学』『トルコ 世紀のはざまで』など。

●鷲田清一（わしだ　きよかず）
1949年京都府生まれ。大阪大学文学部教授、文学研究科長、理事・副学長を経て、2007年8月に大阪大学総長就任。専門は臨床哲学、倫理学。

人材養成と イノベーションの相乗効果で 世界標準の博士人材を 輩出しよう

文部科学省 科学技術振興調整費 イノベーション創出 若手研究人材養成プログラムに採択 協働育成型イノベーション創出リーダー養成

● 先端科学イノベーションセンター　教授
産学連携推進本部イノベーション創出部　部長
兼松泰男── *Yasuo Kanematsu*
E-mail : kanematu@casi.osaka-u.ac.jp

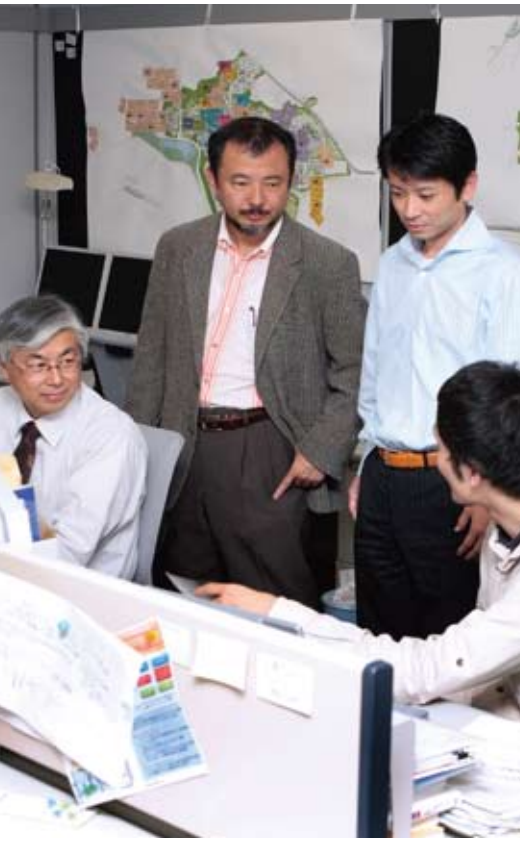
文部科学省「平成20年度科学技術振興調整費 イノベーション創出若手研究人材養成」に、大阪大学が申請した「協働育成型イノベーション創出リーダー養成」が採択された。これまでの産学連携とは異なるプログラムの目的や内容を紹介する。プロジェクトの狙いや特色を語る兼松泰男教授の話から、海外の博士人材との違いも浮き彫りになってくる。

◉プログラムの目的

資源の乏しいわが国が激しい国際競争の中で持続的にイノベーションを創出していくために、高い専門能力だけでなく幅広い視野を持ったイノベーション創出人材を社会全体で養成する新しいシステムが必要となってきている。

本プログラムは、大阪大学が中心となって産業界および社会との間にパイプラインを形成すべく「イノベーションコミュニティ」を立ち上げ、博士人材が広く社会で活躍できるシステムを構築することを目的としている。

このイノベーションコミュニティは、新事業、新企画、新技術の創出を志向する経済団体、企業、自治体、NPO／NGOなどに属する組織・個人から構成され、自由な情報交換の場であり、課題・問題発掘と解決の場として機能させる。コミュニティ構成員が設定した具体的な事業課題によりプロジェクトを形成し、イノベーション創出を推進することを目指している。



◉イノベーションの場の創造

全学的な取り組みで、イノベーション人材としての院生・ポスドクの意識的な受け皿となり支援する教員・研究室・プログラムを登録・確保し、対外的に発信する。また、参画企業、組織との合意形成を進め、大企業の研究開発・事業戦略部門、中堅・中小企業の第二創業、ベンチャー企業、自治体を含む団体・組織、イノベーション支援機関に加え、海外の組織・機関を包含した、イノベーション人材育成を中心課題とするコミュニティを構築し、充実させる。

真にリーダーとして活躍する人材、次世代の日本社会を担う人材を産学・社学協働で養成することがポイントになる。これまでのような人材育成だけにとどまらず、イノベーションの場を創造することによる「人材養成とイノベーションの相乗効果」を、兼松泰男教授は強調している。

Cooperation toward Leadership in Innovative Creation

「協働育成型イノベーション創出リーダー養成」のホームページ▶http://www.uic.osaka-u.ac.jp/led/index.html

◎INTERVIEW ●兼松泰男教授に聞く

イノベーションコミュニティを核に事業価値と博士活躍の場を創造する

――今回の5年間にわたる事業の主体となる若手研究人材、特に大阪大学のポスドク（博士研究員）と博士後期大学院学生の現状から。

現在、特任教員を含むポスドクは約950人で、2003年から5年間で4倍に増えています。博士後期の大学院学生は3千数百人です。博士課程修了後の就職状況を見ると、企業就職が28%、大学院の教員になる人が9・2%。残りの6割を超える若手研究者のキャリアパスが問題です。

今回われわれが推進している「イノベーションコミュニティ」の構築は、大学の外側に博士が活躍できる場所を作るのが狙いです。日本の産業社会が大きく変わるためには、博士人材がどんどん社会に出ていって活躍することが必要です。しかし、日本の企業の方とお話をしていると、大学とはお付き合いをして数百万円の共同研究はやるけれども、重要な新技術は外国のベンチャーなどから買うというところもある。自国で、自社で新しいものを開発するという姿勢が欠けているのではないでしょうか。一方、大学にも問題があり、研究後継者養成の場から脱皮できていません。そこで、「イノベーションコミュニティ」をつくって対話をしましょうということです。

――博士人材を活用してイノベーションを実践するという点で、海外とのギャップは大きいですか。

世界的にみると、若い博士が研究開発の先頭に立ってやっています。最先端の技術や知識を生かして新しい仕事、いわゆるイノベーションを推し進めるのであれば、必ず高度な人材がいるはずです。世界ではそれは当たり前で、博士がいろんなところで活躍していて、大学の中に閉じこもって研究だけしているわけではないのです。

世界で活躍しようと思ったら博士というパスポートが必要です。日本ではマスターで就職し、ちょっと変わった人が研究職として残ると勘違いされている。しかし、頭を切り替えてください。博士人材は世界で活躍しており、若い人たちにはそういう志を持った博士になってほしいのです。

大阪大学はイノベーションを切り開いていくような博士をサポートし、責任を持って輩出していく大学でありたい。そこで、ドクターに進んだら後でこんなすごいことができるというところを見せたいと思っています。

――それが「人材養成とイノベーションの相乗効果」を狙った取り組みですね。人材養成システムの内容は？

システムはシンプルで、「実践プログラム」「キャリアデザインプログラム」「イノベーション創出データベース」で構成されています。

実践プログラムは、要するに本格的な共同研究です。それはお付き合いではなく、大学に任せるのでもなく、企業として価値を創造するということに着目してほしいのです。イノベーション創出ニーズからスタートして、解決を要する課題を設定し、若手人材を阪大に限らず全国公募して、解決に当たります。「事業価値の創造」すなわち「博士活躍の場の創造」がゴールとなります。

キャリアデザインプログラムは、社会（企業）と若手研究人材との対話・交流の場である「イノベーションフォーラム」、世界のトップランナーの手法を学ぶワークショップ「オープンカリキュラム」、学部教育と連携した人材養成プログラム「キャリア・ダイナミックス・デザイン」で構成されます。

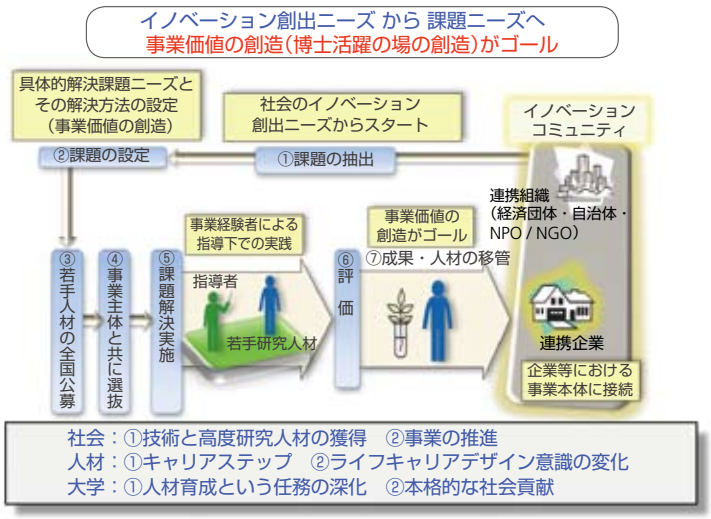
イノベーション創出データベースは、若手研究人材や企業などを対象とする「メンバー登録」と、養成人材を対象とする「キャリア電子カルテ」で、広くニーズとシーズをデータベース化します。

――実施体制について。

総長をトップとして、理事による「若手研究人材養成」検討会議をはじめ全学体制で取り組み、産学連携推進本部のイノベーション人材育成部門が実施組織の中心となります。アドバイザリー委員会には、大手企業の重役クラスに外部有識者として加わってもらいます。関西経済同友会、大阪商工会議所、関西文化学術研究都市推進機構、大阪医薬品協会、関西電力、三菱電機、富士ゼロックスKDIなど、現時点で、すでに、計90を超える組織・企業と連携協力について合意しています。

われわれが目指しているのは、世界標準の博士を輩出すること、外部と協力してキャリアパスを切り開き、日本の研究開発のシステムを変えていくことです。

▼実践プログラムのモデルスキーム



仏教精神を基本に人を育てる
「20年先を目標にして進めば何でもできる」

◉OB訪問

学校法人清風学園・学校法人清風南海学園　理事長――平岡英信――Hidenobu Hiraoka

学校法人清風学園理事長の平岡英信さんは、大阪大学理学部数学科を卒業後、教育一筋の道を歩み、今も清風高等学校・中学校の校長として、毎朝の朝礼で生徒に話しかけている。オリンピックで体操のメダリストを輩出するとともに府下有数の進学校である同校では、仏教精神に基づく教育が行われ、全校生徒による般若心経の読経から一日が始まる。

●平岡英信（ひらおか　ひでのぶ）氏
1929年京都府生まれ。54年大阪大学理学部数学科卒業。85年清風中学校・高等学校校長、94年学校法人清風学園・学校法人清風南海学園理事長。日本体操協会顧問。全国高等学校体育連盟理事。大阪大学大学院理学研究科理学部理学懇話会委員。勲四等瑞宝章。

旧制大阪高等学校の最後の年を共に過ごした親友の勧めで、平岡さんは新制大阪大学の理学部数学科に進学した。

「当時の数学科は、後に総長になられた代数学の正田建次郎先生や、エスペラントで授業をされていた解析学の南雲道夫先生など、世界的な学者がおられて、学問に対する真摯な雰囲気に満ちていました。試験のときは、助手が黒板に問題を書いて『できたら研究室へもってこい』。誰も監督していなくても、カンニングしたりする者はいませんし、できなくても自分から『あかん、また次や』と引き下がる。おおらかな時代でしたね。珍しく企業から数学科に求人が来たので、一番お金に困っているA君が応募しました。求人先の推薦状を書くにあたり、担当の南雲教授が『私は君のことをあまり知らないので、いろいろ質問するから答えるように』と言われ、『君は正直か』と質問されたので『時々嘘をつきます』と答えたら、推薦状に『時々嘘をつく』と書かれて大笑いになりました。A君は『参ったよ』と言いながらも、無事採用されました」

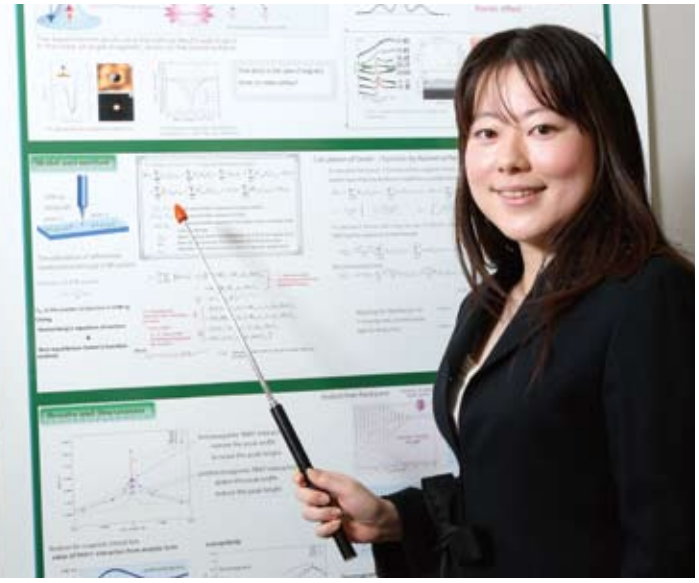
平岡さんは卒業後、父の宕峯氏（高野山真言宗大僧正）が創立した清風学園で、数学を教えることになった。知育、徳育と並んで体育も重視した。体操との出合いは、体操の上手な生徒が一人入学してきたことから始まる。「せっかくこんなにできる子が入ってきたのだから伸ばしてやらないといかん」と思い、体操部を創設した。自身はヨットに親しんでいたが、体操は全くの素人。鉄棒とマット、そして指導者を用意してスタートした。

「そのとき、5年で大阪で優勝して、次の5年で近畿で優勝、次の5年で全国で優勝、その次の5年でオリンピック選手を出すという20年計画を立てました。そうしたら15年で監物くんが出た」。メキシコ、ミュンヘン、モントリオール五輪で団体1位、種目別でも上位の成績をあげた監物永三さん（日本体育大学副学長）である。具志堅幸司、池谷幸雄、西川大輔、そしてアテネ、北京五輪の鹿島丈博といったメダリストが続く。

「明日オリンピック選手を出せと言われても、これは無理。だけど20年先を目標において、それに向かって進めていったら何でもできる。私はそう思っています。生徒にもそのことを言うのです」

体験を通して心身を磨く行事の一つが「高野山１００キロ歩行」。学校から高野山まで、昼夜兼行で36時間ほど歩き続ける。毎年約５００人が参加し、足を引きずりながらも助け合い、眠たくなっても励まし合っていく。生徒たちの間に友情が芽生え、困難を乗り越えたあとの達成感が「生きる力」の根源になるという。ゴールの高野山奥の院で、平岡さんは語りかける。「これからの人生でどんなに困難な問題が起こっても、この足のマメが君たちを助けてくれる」

平岡さんは毎日、朝礼で般若心経を読誦させて、心の中に良いイメージを植えつけるため「暗示」を行っている。「慈悲」の大切さも説いている。「教育はなかなか理想通りにはいきませんなぁ。カンニングする生徒も出てきます。朝礼なんてやめようかと思うこともあります。けれども、チベットのあるお坊さんが『おちょこに酒を入れて、それを捨てたら何もないと思うだろうが、においが残る。このにおいが大事なんや』と。毎朝、生徒に話していれば、このにおいのように蓄積されていくものがあるということでしょう」



不思議な現象を理論的に説明

2008年度「ロレアル―ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」受賞

● 大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻博士後期課程　2年生
南谷　英美――*Emi Minamitani*

物質科学と生命科学の分野で優秀な研究成果をあげた若手の女性科学者を対象とする「ロレアル－ユネスコ女性科学者日本奨励賞」を、工学研究科博士後期課程の南谷英美さんが受賞した。数十年後には原子のレベルの記録デバイスなどに応用されるかもしれないという最先端の理論を開拓しつつあるが、高校時代は「実は物理や数学は苦手だった」という。

若手女性科学者の育成を支援する「第3回ロレアル―ユネスコ女性科学者日本奨励賞」の受賞者が8月26日に発表され、南谷さんは物質科学の分野で受賞。奨学金100万円が贈られた。

テーマは「情報化社会の発展への寄与を目指して―〝スピン〟が生み出す多彩な物性」。電子の持つ「スピン」という特性によって生み出される磁性が電気伝導にどのような影響を及ぼすか、複数電子のスピンの相互作用によってどのような現象が起こるかを理論的に解明しようとしている。

スピンとは？　「相対論的量子力学に由来する自由度で、物性物理学ではたいへん重要な概念です。すごく小さい磁石をイメージしてもらうといいですね」。自由度とは？　「物質の状態を規定する要素で、それが分かれば物の性質が分かる、その物がいったいどういう状態にあるかを決める量です。たとえば、物がここにあることは3次元空間ではx、y、zの座標で決まりますね。量子力学ではさらにスピン座標というものがあって、それが分からないとその物がどういう状態にあるか決められないのです」。やっぱり難しい。

理論は実験と相まって物理学を発展させてきた。「実験で何かが見えても、それが本当にスピン由来のものかどうかは、理論のほうからのアプローチがなければ分かりません。実験ではまだ見えてないところを予測して、ここをこういう状態で見ればもっと面白いものが見えるんじゃないかと提案していくのも理論の仕事です」

理論の人である南谷さんは、一歩一歩考えを進めながらも難所を乗り越えるには「ひらめき」が必要だという。机の前で考えているときよりも、お風呂に入っているとき、ご飯を食べているとき、電車の中などで、「あーやったらうまくいくわ」「あの式を使ったら」と思いつく瞬間があるそうだ。

このようにして生まれた理論が数十年後、あるいはもっと先で、「原子レベルでスピンの制御ができると原子1個が情報を保持できるようになり、原子オーダーの記録デバイスの開発につながるかもしれない」。

地球物理学を研究している叔父の影響で、子どものころから科学関連の本が身近にあったが、高校時代は「どちらかというと文系で物理や数学は苦手だった」という。「物理というと難しそうと感じる人が、特に女性には多いでしょう。私もそうだったけど、やっているうちにこんな面白い世界があったんやと思えてきました」

南谷さんの趣味は手品。工学部時代に奇術研究会に所属し、トランプのカードを鮮やかに操る。量子力学も手品も、一見すると不思議な現象であるところが共通している。

「粒子が波の性質を持つ量子力学では、物体をすり抜けるようなトンネル効果など、あり得ないようなことが起こるところに面白さがある。常識だと起こらないように思える不思議な現象でも、その裏にちゃんと説明できる仕組みがあり、しかも応用できるのが面白い」

●南谷英美（みなみたに　えみ）
1982年大阪府生まれ。四天王寺高等学校卒業。大阪大学工学部応用自然科学科卒業。現在、同大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻（笠井秀明教授）博士後期課程2年。文部科学省21世紀COEプログラム「物質機能の科学的解明とナノ工学の創出」のリサーチアシスタント、続いてグローバルCOEプログラム「高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点」中での研究テーマ「強相関電子系材料を用いたナノデバイスの物性評価計算手法の研究開発」のチーム代表者を務める。2008年度第3回ロレアル―ユネスコ女性科学者日本奨励賞受賞。

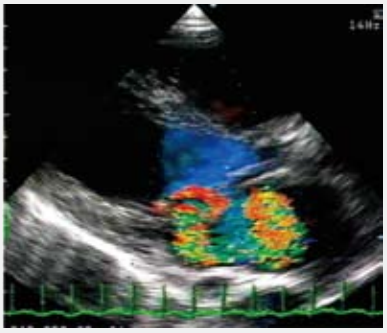
HEALTH

■健康

「感染性心内膜炎について」

大阪大学大学院医学系研究科
教授
中谷　敏――Satoshi Nakatani
E-mail : nakatani@sahs.med.osaka-u.ac.jp

感染性心内膜炎という病気をご存知でしょうか。心臓に細菌や真菌がとりついて敗血症を惹き起こす感染症です。菌は主には心臓弁膜近辺で増殖して疣腫とよばれる可動性に富む菌―血小板・フィブリン複合体を形成し、弁膜の構造を破壊します(**図左**)。そのため高度の弁逆流を生じたり(**図右**)、心筋内に膿瘍を形成しさらには心筋に孔があいて心腔間に交通路ができることもあります。弁逆流は心不全を惹き起こし、また疣腫はその一部がはがれて血流に乗りさまざまな部位に流れて脳梗塞をはじめとした全身性塞栓症を起こします。感染性心内膜炎は元来弁膜に何らかの異常を持つ人や、以前に人工弁による弁置換術を受けた人が、たまたま体内に菌が侵入したときにそれが異常弁膜近辺に取り付いて発症すると考えられています。しかし今まで心疾患を指摘されたことのない人にも感染性心内膜炎が発症しうるということがわかってきました。また体内に菌がはいる機会として歯科治療が多いと考えられていましたが、特にきっかけがない場合にも感染性心内膜炎が起こることもわかってきました。



著明な僧帽弁逆流を認める

図　感染性心内膜炎

感染性心内膜炎はしばしば命に関わる病気です。診断がつけば大量の抗菌薬を長期にわたって投与しなければなりません。また手術治療が必要になることも多く経験されます。したがって感染性心内膜炎が疑われたらできるだけ早く診断して、専門医療機関で治療を始めることが大切です。風邪でもないのにいつまでも熱が続くような場合、特に歯科治療後にそのような状態が続いている場合は要注意です。では専門医はどのようにして診断するのでしょうか。診断には血液中の菌を証明することが大切ですが、検査として一番活用されるのが心エコー検査です。心エコー検査は超音波を心臓にあててその反射から心臓の動きや大きさ、弁狭窄、弁逆流、異常構造物などを検出する検査です。また心不全の程度も知ることができます。したがって心エコー検査で疣腫を検出し、弁逆流を評価し、心不全の程度を知ることで早期診断ができ早期に治療にとりかかることができるのです。胸の上から超音波をあてる普通の心エコー検査でよくわからない場合には、胃カメラ型のエコー発信装置を飲み込んで食道から観察する経食道心エコー検査が大変に有効です。また不幸にして脳塞栓症や脳出血を起こしてしまった例では脳の評価が極めて重要になります。そのときに威力を発揮するのが、頭部CT検査、MRI検査、MRA検査です。これらの検査で障害部位やその広がり具合を経時的に見ながら手術タイミングを決めなければならないこともしばしばあります。

このように感染性心内膜炎の診断、治療の上で画像診断は極めて重要な意味合いを持ちます。感染性心内膜炎は各種画像検査技師、看護師、循環器内科医、循環器外科医、脳内科医、脳外科医、感染症専門医のチームワークの上に治療が成り立つ疾患と言っても過言ではないでしょう。このような疾患では検査技師には単なる画像取得技術だけではなく、病態を十分理解した上で最大の情報を引き出す力が求められます。われわれ保健学科では日頃から画像診断学のみならず病態理解に重点を置いた教育を行っており、たとえ今まで見たことのない疾患に遭遇しても、病態理解に基づいて診断に直結するような良質の画像を提供できる優秀な人材を育てています。

感染性心内膜炎はそれほど多い病気ではありません。しかし不幸にしてかかったときにその可能性に気がつかなければ診断や治療が後手に回って予後不良となります。いつまでも原因不明の熱が続くような場合にはすぐれたチーム医療を実践している専門医療機関を受診されることをおすすめします。

PSYCHOLOGY

■心理・行動

「百寿者のからだとこころ」

人間科学研究科
准教授
権藤　恭之――Yasuyuki Gondo
E-mail：ygondo@hus.osaka-u.ac.jp

■超高齢社会日本

最近、テレビを見たりラジオを聞いたりしていると「高齢化社会」という言葉に反応してしまいます。老年学の教科書には、高齢者人口が7％を超えたら「高齢化社会」、14％を超えたら「高齢社会」と呼ぶと書かれています。日本の高齢化率は2005年には21％を超えています。我が国は、「高齢社会」を通り越して「超高齢社会」なのです。

私が「高齢化社会」という言葉に、違和感を覚えるのは、それが、現状からかけ離れたのんびりした表現と感じるからなのです。というのも私は、現在100歳以上の高齢者(百寿者)を対象とした研究に携わっており、日本の高齢化の現状について他の人たちより敏感になっているからなのです。我が国の百寿者人口の増加が著しいことは毎年の敬老の日のマスコミ報道でご承知の方も多いと思います。図1には、百寿者人口および同じ年に生まれた人の内、何人に1人が百寿者になれたのかの推移を示しました。図から百寿者人口が増えただけでなく、100歳に到達できる確率が高くなっていることがわかります。

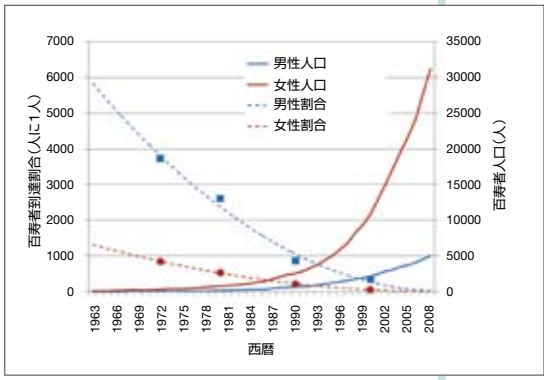


図1　我が国における百寿者人口と百寿者到達割合の推移

■百寿者のからだとこころの健康

我が国では百寿者人口が増加していますが、百寿者の方々の特徴は世界的にもよく分かっていないのが現状です。特に心理学を専攻する研究者としては、百寿者の方々の日常生活の様子や普段どのような気持ちで過ごされているのかが気になりますが、参考になる資料は数えるほどしかありません。私は、2000年から2003年に東京都23区に在住の約300名の百寿者の方を対象にからだとこころの健康について調査をしました。その結果から分かったことは、百寿者の方でからだの健康を維持している方は少ないのですが、こころの健康を維持されている方が比較的多いということでした。普通、私たちはからだが健康でないと長生きしても仕方がないと考えています。また、自分のことが自分でできないことは不幸なことだと考えているのではないでしょうか。ところが、調査の結果はこのような常識を覆すものだったのです。

百寿者の方々のからだの状態は、視聴覚機能、認知機能、身体的機能の3側面から調べました。その結果を総合的にみると機能が非常に優れている人は2％、優れている人は18％、身体機能もしくは認知機能が低下している人55％、寝たきりの人25％で、すべての機能が優れており、日常生活で自立していた人はわずかに20％(男性40％、女性14％)にすぎませんでした(図2)。ところが、身体機能が低下していても認知機能が高かった方々の幸福感はけっして低くなかったですし、身体機能が低かった65歳から85歳ぐらいの高齢者に比べると幸福感は逆に高いぐらいだったのです。

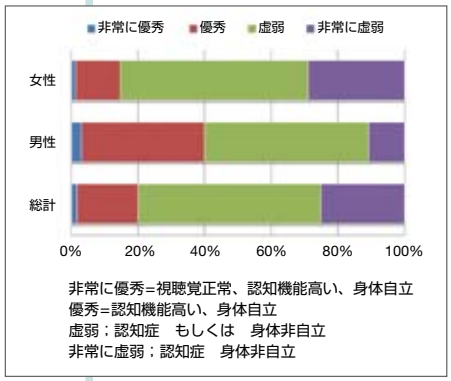


図2　東京の百寿者の機能レベルの内訳

■百寿者のこころの健康の秘密を求めて

これは、調査に伺った時の印象とも一致していました。最も印象深かったのは105歳の女性に対して質問した時のエピソードです。生活のほとんどは同居の娘さんに依存していて、自由に動き回ることはできず、普段は日中も部屋の中にある椅子に腰かけて過ごしていることが多い方でした。ところが、生きることについての質問に対して「生きていたら、(こんな状態だけども)だめながらも娘の話し相手になってあげられるから」とお答えになったのです。もちろん、自身も高齢者である娘さんの献身的なお世話がこの言葉の背景にはありますが、このような考え方ができるようになることが長寿の恩恵であり、百寿者の人達の幸福感を支えているのだと、強く印象付けられました。

私は、自分自身が置かれた状況をありのままに受け入れ、物事のポジティブな側面に注目できるようになれることが高齢期の心理的発達の重要な側面ではないかと考えています。そして、その秘密を明らかにすることで、「超高齢社会日本」のしあわせに貢献したいと思っています。

ヒューマンインタフェースを形に

人の五感や直感に反応する新技術を多方面に応用

● 情報科学研究科　教授
岸野文郎── *Fumio Kishino*
E-mail : kishino@ist.osaka-u.ac.jp

● 情報科学研究科　准教授
北村喜文── *Yoshifumi Kitamura*
E-mail : kitamura@ist.osaka-u.ac.jp

岸野教授(左)と北村准教授。後ろのディスプレイは「ビデオから作る自律エージェント」

情報科学研究科マルチメディア工学専攻の「ヒューマンインタフェース工学講座」では、人間が機械に合わせる従来のマンマシン・インタフェースではなく、日常生活の中での体験や自然な動きなどを利用した人に優しいインタフェース技術を追究している。岸野文郎教授と北村喜文准教授のもと、大学院生・学部生35人が、マルチメディアを駆使して人間の五感に反応する新しいヒューマンインタフェースの研究に取り組んでいる。

人間中心のインタフェースを実現するためには、マルチメディア技術や認知工学の研究を基に、人の直感や感性、身体性などに柔軟に対応し、創意工夫を具体的な形にしていかねばならない。

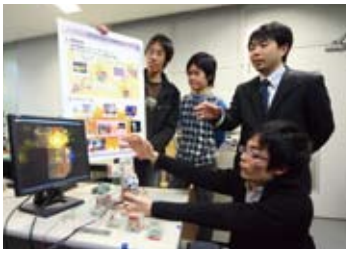
岸野教授は、「学生には自主性を発揮してほしいので、テーマを上から与えるのではなく、先輩たちの研究成果などを参考に、自分たちはこんな研究がしたい、こういうものをつくりたいという独自のテーマを生かす方向でいろいろアドバイスしています」という。学生のモチベーションは高く、国内外の学会で積極的に発表し、表彰や受賞も数多い。北村准教授と各担当の学生に説明してもらった最近の成果を紹介する。

■雨を感じる傘「アソブレラ」

授業の演習の中から生まれたテーマ。第16回国際学生対抗バーチャルリアリティコンテストで審査員特別賞と各務原市民賞を受賞。憂うつな雨ではなく、情緒ある静かな雨やバケツをひっくり返したような激しい雨を、濡れることなく体験できる。地球の裏側にいる人ともその体験を共有できる。ときには傘にヘビが落ちてくることも。

■アクティブ・キューブ

立方体のブロックを自由に組み合わせてさまざまな形状を作ることによって三次元世界を構築し、直感的にその世界とインタラクションできる実物体型インタフェース。子どもの発達障害や認知症における空間認知能力の評価とリハビリへの応用を想定した共同研究を、外国の研究機関と進めている。



■イリュージョン・ホール

3人以上の利用者が各視点位置から、ひずみのない立体映像を共有できるディスプレイ。例えば、手術前のシミュレーションで心臓の患部を指させば、医師や看護師などのスタッフが同じ位置を確認できる。

■複数ディスプレイ環境におけるマルチモーダルインタフェース

複数の人がその場所でほしい情報を一番見やすい形で受け取り、それらの情報を複数のディスプレイ間で交換して、会議や作業を円滑に進めることができる。視線やジェスチャなどを利用して、直感的なインタフェースが実現できる。

■ミステリアス・ポンド(神秘の池)

回転偏光板による情報可視性制御法のアプリケーション例。水面にランタンをかざすと隠れていた魚が現れてくる。ある人にだけ見せたい情報を見せることができ、会議やゲームに応用可能。一つのデスク(ディスプレイ)で、共通の画面と同時に他人に見せたくない自分専用の情報を表示できる。

■ビデオから作る自律エージェント

実在の人やペットがサイバースペースで自律的に動き回る。環境情報を読み取るセンサと感情モデルを持ち、ファジー推論によって行動を選択するので、ビデオ映像素材をつないで自律的に動かせる。つらい体験で怒りや恐れの感情が増えたりもする。新しいインタラクティブ映像メディア技術として、多方面への応用を検討中だ。

和やかに名誉教授会開催

名誉教授会世話人と歴代総長による万歳の三唱

毎年恒例の名誉教授会が11月17日(月)、リーガロイヤルホテル「山楽の間」で、名誉教授81人、名誉教授会から招待された総長以下部局長ら40人が出席して開催されました。

名誉教授会終了後に行われた懇親会では、お互いの近況報告など旧交を温めながら、終始和やかな雰囲気の中で懇談が行われ、最後に櫻井洸名誉教授(産研)の発声による万歳三唱により盛会のうちに終了しました。

第２回京都大学・大阪大学・神戸大学連携シンポジウム 都市と地域の防災・減災～自助・共助・公助そして企業の「産助」～

昨年度より、大阪大学、京都大学、神戸大学の３大学が連携して、各分野における世界に通用する高度の人材を育成し、将来、関西の知的創造拠点を形成することを目指して、国際シンポジウムを開催しています。

このシンポジウムでは、防災・減災や医療技術、情報通信、環境問題、文化財保護といった未来生活の課題とも言うべきさまざまな分野を取り上げて、３大学連携により世界の「知」を集積し、社会への発信に取り組んでいきます。

【日　　時】平成21年１月14日(水)10：00～17：30
【場　　所】大阪国際会議場(大阪市北区中之島５-３-51)
【参加登録】http://www.3univ.jp/

大阪大学第２回男女共同参画シンポジウム「ワーク・ライフ・バランスの実現をめざして」開催

多様な人材活用推進委員会(委員長：松繁寿和国際公共政策研究科教授)と女性研究者キャリア・デザインラボは、11月４日(火)、平成19年度文部科学省科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成プログラムとして採択された『次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖の形成』の活動の一環として、大阪大学第２回男女共同参画シンポジウム「ワーク・ライフ・バランスの実現をめざして」を基礎工学部シグマホールで開催し、本学の教職員や学生、他大学、民間企業等の男女共同参画担当者など、120人を超える参加がありました。

シンポジウム開催にあたり、武田佐知子理事から開会の辞があり、鷲田清一総長からビデオによる挨拶が行われました。その後、学外からお迎えした坪田秀子氏(日本ロレアル㈱取締役副社長)、須田勝也氏(パナソニック㈱人事グループ・グループマネージャー)、青野由利氏(毎日新聞社論説委員)、脇坂明氏(学習院大学大学院経済学研究科教授)による講演が行われました。

パネルディスカッション(左から脇坂氏、青野氏、須田氏、坪田氏、松繁教授)

最後に多彩な講師陣によるパネルディスカッションが松繁委員長の司会により行われ、組織も個人も幸せになるような制度や社会の仕組みなどについて討論されました。会場からも積極的な意見や質問が出され、盛況のうちに幕を閉じました。

受　賞

平成20年秋の紫綬褒章受章　増原宏名誉教授(工学研究科)

堂山英次郎講師(文学研究科)**「第50回日本印度学仏教学会賞」**受賞
佐藤尚弘教授(理学研究科)**「高分子学会賞」**受賞
森田清三教授(工学研究科)**「The Albert Nerken Award」**受賞
山中伸介教授、黒崎健助教、牟田浩明助教(工学研究科)**「第２回日本熱電学会欧文論文賞」**受賞
「環境リスク管理のための人材養成」プログラム(工学研究科)**「第12回工学教育賞文部科学大臣賞」**受賞
工学研究科「e-Learning大賞：文部科学大臣賞」受賞
赤井伸郎准教授(国際公共政策研究科)**「第48回エコノミスト賞」**受賞
藤田一郎教授(生命機能研究科)**「日本神経科学会時實利彦記念賞」**受賞
中谷和彦教授(産業科学研究所)**「大阪科学賞」**受賞
伊東一良教授、栖原敏明教授、中山喜萬教授(工学研究科)**、松田彰久特任教授**(基礎工学研究科)**、朝日一教授、川合知二教授、松本和彦教授**(産業科学研究所)**「第２回応用物理学会フェロー表彰」**受賞

Schedule――◇シンポジウム等

●**平成20年度第２回学際融合教育シンポジウム**
平成21年１月20日(火)、コンベンションセンター。
問い合わせ先＝学際融合教育研究プラットフォーム
(TEL06-6850-6214)　E-mail：gakuseiplat@ns.jim.osaka-u.ac.jp

●**実践的ソフトウェア工学教育に関する国際シンポジウム**
１月22日(木)、千里阪急ホテル。問い合わせ先＝IT Spiral事務局
(TEL06-6850-6342、FAX06-6850-6574)
E-mail：ITSpiral-symposium@ist.osaka-u.ac.jp

●**The Second International Symposium of WPI Immunology Frontier Research Center, Osaka University**
２月12日(木)～13日(金)、医学部銀杏会館。
問い合わせ先＝(TEL06-6879-4275)
E-mail：ifrec-office@ifrec.osaka-u.ac.jp

●**First International Symposium on Atomically Controlled Fabrication Technology -Surface and Thin Film Processing-**
２月16日(月)～17日(火)、医学部銀杏会館。
問い合わせ先＝グローバルCOE「高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点」事務局　(TEL06-6879-7296、FAX06-6879-7301)
E-mail：gcoe-symposium@gcoe.prec.eng.osaka-u.ac.jp

●**“in silico Medicine” Spring School 2009 Course on Computational Biology and Biomedical Engineering**
３月８日(日)～11日(水)、
ホテルコスモスクエア国際交流センター(大阪市)。
問い合わせ先＝E-mail：gcoe-ss@me.es.osaka-u.ac.jp
http://www.mei.osaka-u.ac.jp/gCOE/SpringSchool/

●**第５回東アジア地域連携フォーラム**
３月21日(土)～22日(日)、ソウル建国大学(韓国)。
問い合わせ先＝国際公共政策研究科・野村研究室
(TEL06-6850-5625、FAX06-6850-5656)
E-mail：miseon.feal@gmail.com

●**日本基礎心理学会2008年度第２回フォーラム**
３月28日(土)、人間科学研究科ユメンヌホール。
問い合わせ先＝人間科学研究科・森川和則教授
E-mail：morikawa@hus.osaka-u.ac.jp

Handai NEWS Letter No.42 2008・12・Winter [阪大ニューズレター]
●発行日平成20年12月1日 ●発行・大阪大学 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘一一・TEL 06・6877・5111
●編集・大阪大学総務部評価・広報課広報・社学連携事務室 ●編集協力/毎日新聞総合事業局
OSAKA UNIVERSITY 大阪大学

大阪大学・東北大学合同フォーラムをサンフランシスコで開催

9月18日(木)、本学サンフランシスコ教育研究センターと東北大学米国代表事務所とが合同企画した「大阪大学・東北大学合同フォーラム－Joint Forum on Innovative Research and Philosophy of Science(革新的研究と科学哲学)」がサンフランシスコ市内中心部にあるパレスホテル(The Palace Hotel San Francisco)にて開催され、本学から鷲田清一総長と武田佐知子、辻毅一郎両理事・副学長、東北大学からは植木俊哉理事を迎え、6人の講演が展開されました。

▲挨拶をする鷲田清一総長

▼フォーラムのオープニング風景

両大学の首脳の基調講演でフォーラムは幕を明け、本学工学研究科の河田聡、石黒浩両教授、東北大学の大見忠弘名誉教授および宮崎照宣教授が両大学の誇る研究プロジェクトの紹介を行い、両大学の21世紀における取り組みについて発表を行いました。

４件の最先端研究に対し、大阪大学の歴史とネットワークの重要性を説明した上で新研究領域の創出に向けた融合研究とその背後にある「科学の考え方(哲学)」を説く鷲田総長の講演は総合的で分かりやすく、文理間のバランスを取る感動的なもので好評でした。フォーラムにはおよそ180人の参加があり、米国西海岸にて両大学のプレゼンスを示すという目的を達成する結果となりました。

フォーラムに参加した鷲田総長、武田、辻両理事・副学長、河田、石黒両教授ら

フォーラム前日には、在サンフランシスコ日本総領事館である長嶺安政総領事の主催する日米交流会に出席し、カリフォルニア大学デイビス校ウィリアム・レイシー副学長らとの懇談を持ち、フォーラムの翌日19日(金)にはスタンフォード大学とカリフォルニア大学バークレー校へ鷲田総長、武田ならびに辻両理事・副学長が表敬訪問しました。大阪大学とスタンフォード大学ならびにカリフォルニア大学バークレー校との今後のより密接な交流が期待されます。

第1回大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム開催「地域と大学が一緒に考える“まち育て”」

第１回大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム「地域と大学が一緒に考える“まち育て”」が、大阪市中央公会堂で10月16日(木)に開催されました。

シンポジウムは、武田佐知子理事・副学長の挨拶のあと、第1部では、作家で地域雑誌「谷中・根津・千駄木」編集人の森まゆみ氏による基調講演「小さな雑誌で町づくり～東京の文化遺産を守り、活かす」で始まり、続いて行われたパネルディスカッション「大阪で学ぼう　大阪を学ぼう　～未来に引き継ぐ“まち”の記憶」では、財団法人サントリー文化財団上席研究フェローの佐藤友美子氏、大阪市ゆとりとみどり振興局総務部集客プロモーション担当課長の花田公絵氏、立命館大学教授で雑誌「上方芸能」編集代表の森西真弓氏、本学総合学術博物館の橋爪節也教授が登壇し、本学名誉教授で関西学院大学大学院教授の宮本又郎氏がファシリテーターを務め、大阪の歴史を振り返りつつもこれからの大阪を元気にするためにはどうすべきか活発な議論が交わされました。

活発な意見が交わされたパネルディスカッション

また、第2部では、社学連携の例として二つのプレゼンテーションが行われ、NPO法人チャイルド・ケモ・ハウス理事の田村太郎氏による「チャイルド・ケモ・ハウスの試み～小児癌の子どもたちのための専門病院設立を目指して～」が、また、コミュニケーションデザイン・センターの平川秀幸准教授による「大学の使い方教えます～サイエンスショップってなに？～」が発表されました。

鷲田総長らと参加者が意見交換を行ったタウンミーティング

続いて行われたタウンホールミーティング「大阪の“まち育て”とりあえず、一緒に考えましょ」では、鷲田清一総長と武田理事・副学長を中心に登壇者全員が加わり、参加者と一緒になって活発な意見交換が行われました。

当日は、在阪企業関係者や近隣自治体職員、文化NPOの関係者、本学関係者、一般参加者など約160人もの出席を得て盛況のもとに終了しました。

NEXT ISSUE・No.43 ◉大阪大学の先端研究について特集します。

[阪大ニューズレター]次号(43号)の特集予告

●大阪大学または阪大ニューズレターへのご意見、お問い合わせがありましたら、Eメールで受け付けております。E-Mail:NEWSLETTER@star.jim.osaka-u.ac.jp

◎阪大ニューズレターは、新聞古紙の再生紙を使用しています。